

勝福寺寺報

ひびき

第108号

2024年1月1日

南無阿弥陀仏 ～人と生まれたことの意味をたずねていこう～

「愚」に還ろう

親鸞聖人は自らを「愚禿」と名のられた。あるいは、「悲しき哉、愚禿」と述懐された。

「愚」の反対は「賢」である。賢愚の基準は「知」である。自らを「愚禿」と名のられたということは、「知」は危ういということである。そう、「知」には「闇」がある。「知」には「毒」がある。

「知」はものを対象化して認識する。対象化して認識するということは、全体としてあったものを、ある尺度で切り取って認識するということがある。つまり、全体としてあった「いのち」を、ある部分だけの「物」にしてしまう。ひと言で言えば「いのちの「物化」である。

だから、「知」はその本質において「いのち」を奪うものであり、罪深いもの

である。「知」に立つ限り、無条件に他を愛し、他を信じていくことができない。「知」の根っこに疑いや畏れが潜んでいる。他と競争し、他に勝とうとし、他より優れた武器を持つとする。今や



だから仏教では「知」を「無明」と言ってきた。「煩惱」は自覚しやすいが、知の無明性は自覚しがたい。「根本無明」である。

親鸞聖人はそうした知のもつ無明性に目覚められて「愚禿」と言われたのではなからうか。

よしあしの文字をもしらぬひとはみな

まことのこころなりけるを

善悪の字しりがおは

おおそらごとのかたちなり

(「正像末和讃」)

世の中、まことに「おおそらごとのかたち」が跋扈している。

ウクライナは軍需産業の壮大な実験場となってしまう。「知」の結晶のようなものを搭載したドローン(無人機)やミサイルがウクライナの人々や大地の上で炸裂している。

人間の「知」が人間を滅ぼしていく。

「知」は、人類が住めなくなるほど温暖

(絵「阿修羅の悲しみ」 知道・画)

秋季彼岸会 並 永代経法要 法話

(九月二十四日)

いのち みな生きらるべし

藤谷 純子



先程、お二人の尊い感話を聞かせていただきましたが、そういう方々がいらっしやるお寺の坊主という座をいただいて、早36年になります。

出雲路先生との出遇い

仏法のご縁は、こちらから求めたというよりも、思いがけない形で、金沢大学時代に出雲路先生にお出遇いしたこと、もう50年以上のお育てをいただいています。

先生に出遇った当時の私は、一浪したその一年間は昼夜逆転してたつ

た一人、これまでの生き方を顧みては否定的にしか受け止められず、大学を遠い金沢の地に選んだのも、清浄な雪国に憧れて、新しい自分になって新しい生活をしたいと願ったのでした。

しかし大学生活が始まって、さびしく、ひもじく満たされず、感動するものも打ち込めるものもないけだるさがかえて空しい日々を送っていました。そんな時に先生にお遇



出雲路 暢良 先生

いしたのです。

出雲路先生は、学園紛争のまっただ中に、夕方の図書館で古典セミナーという読書会を開いて下さっていました。ある時「あんたは、私はこう思う、私はこうしたいと、私は、私は、と、言うけれど、まず私が在ってなどという私なんてないですよ」「あんたは私を持て余しているんだね」と言われました。

そして「自己とは何ぞや、これ人生の根本的問題なり」という清澤先生の言葉も教えていただきました。

「宗教ってなんですか？」と問うた時も、

宗教などというものはもとよりないのだ

ひよろりと天をさした
一本の紫苑よ

という山村暮鳥の詩で答えて下さいました。

こうして先生によって私は初めて、哲学や宗教の本を読むようになったのでした。忙しい時間を割いて、先生は私のために一緒に読んで下さったりしたのでしたが、私自身が満足できず中止することになった時、先生は「お念仏を申してみませんか？」と言われました。応えることのできない私に「お念仏を申せるようになるまで、もう私の所へは来ないで下さい」ときっぱりと言われました。

それからどの位経ってからか、「京都の大谷専修学院へ行って、自己とは何ぞやということ、しっかりと腰を据えて学んできなさい」と勧めて下さったのでした。

信国先生との出遇い

どこにも身を置くところがなくなつて、京都に行く決心をしました。入学した途端から、掌が合わさらないこと、お念仏が申せないことが苦痛

になり、学院に身を置くことが苦しくなりました。やがてレポート面接の時が来て、自分の状況を書いて提出するんですが、それを読んだ信国先生から、「あんたは自閉的なんだな」。何に対してなら自分を開いていけるんですか？」と聞かれましたが、私が否定するので、先生はあきれたように、「あなたは、本当に自閉的なんだね。『カラマーズフの兄弟』のなかで、アリョーシャがゾシ



信国 淳 先生

マ長老に会ったように、あなたの問題を一挙に解決してくれる人に出会うよりありませんね」とおっしゃいました。

面接を終えて、何か新しい生の予感を感じましたが、また元通りの心の不安に振り回されていきました。ある時学院からの帰り道、急に息苦しくなつて押しつぶされそうになり、その夜フラフラと信国先生のお宅を訪ねていました。「上がりのなさい」と言われて先生の前に坐り、何から話

せばいいのか、沈黙の時間が長く感じられました。

先生がようやく「どうしましたか」

とおっしゃった途端に、「私、生きたいんです！」と言うや、机をたたく音と「その、たい、が生きさせない！」と大きな声が返ってきました。

私は目が覚めたように我に返って、先生の言葉に心を集中していききました。「あんたは自分をまな板に載せて、もうおまえは生きる値打ちがないと殺そうとしている。人生の意義だとか価値だとかをふりかざして、それを自分に要求して生きる生き方は高嶺に造花を咲かそうとする生き方だ。それはどんなに美しくても造花ですよ。自然の花はしっかりと大地に根を下ろしてこそ花開いているでしょう」そして聖典を開いて、高原の陸地には蓮を生ぜず、卑湿の淤泥に蓮華を生ず。

〔聖典465頁〕

という言葉を示して下さいました。初めて聖典の言葉が私に開かれたのでした。

「縁の下に芽を出した草でも、光の方へ光の方へと身を乗り出していくでしょう、そのようにあなたも光を求めて生きて行きなさい。」

南無仏の御名なかりせば現身のただ生き生くることあるべしや

ナンマンドブツとお念仏申すところから、新しい生活が始まりますよ」とお話し下さいました。

初めて合掌し、お念仏申す

この度「いのち みな生きらるべし」という題を掲げましたが、これも信国先生から教えられたリルケの詩の一部分なのですが、

あたかも牢獄から逃れるごとく人は皆

自己の前を逃れんとすれども世に一つのたいなる奇蹟ありわれは感ず

いのち みな生きらるべしと

自分の生きる現実を牢獄のように忌み嫌って、それを受け入れず、ないものねだりをして自分自身を苦しめてきたその在り方に、苦しさの原因があったのだと知らされました。

先生のお宅を訪ねてお話を聞きした三日後の朝、興奮と感動に疲れて、一人遅れて電車に乗りました。私の幻覚なのですが、皆が私をにらみつけ怒っているように見え、私も手に異常な力を感じて人を殺すのではないかと怖くなり、急いで電車を降り走って学院へ行きました。犬も人も花でさえ、いのちあるものが恐ろしかったのです。

学院の勤行が終わった時、そのま

ま院長室へ駆け込んで「私は人を殺しました」と言って泣き伏したというのです。そして、自分が合掌していることに気づきました。「久遠劫来初めて、掌を合す人になられた」と先生が言われました。先生は何も言われず、本当にしずかに見て下さっていたのです。

私達のいのちは生まれてからのたった76年のいのちではない。先生には、久遠劫来の迷いを重ねてきたいのちが、合掌するもの、尊いもの、従えるものに出会いたいと願ってきた願いが、ようやく実現したと見えたのかも知れません。私にとっても、奇蹟としか思われない出来事でした。

先程のリルケの詩に「いのち みな生きらるべし」とありましたが、それはどんないのちであろうとも、みな生きることができるのだという呼びかけでしょう。私達は、能力や権力、お金のある人は生きてゆけるけれども、つまらぬ自分のようなものは生きる資格がない、生きる価値も意味もないと決めつけて自分を苦しめますね。また他人からのこういう言葉や行為にも苦しめられます。しかしリルケは「世に一つのたいなる奇蹟あり」と、どんないのちも皆生きていくことのできる世界があると断言しています。

お経には「青色青光 黄色黄光 赤色赤光 白色白光」と差別即平等の世界を開く仏の智慧が説かれています。私達はそれぞれの価値観や人生観によつて牢獄を作り、その中に自らを閉じ込めて苦しんでいます。自分の作った物差しで自分を縛っていることからの解放が、「いのち みな生きらるべし」という大悲心の呼び声には込められています。

仏様のはかりは温かい

お寺で一緒に聞法した中山美津子さんが、渡辺愛子先生の話された「シビ王物語」を聞いて、言った言葉が忘れられません。ある日王様が窓の外を見ていると、小さな鳩が王様の胸に飛び込んできて「大きな鷹が私を殺そうとしています、助けて下さい」と言うんですね。鷹は「それは私の食べ物だ、それがなくては私は生きていけないのだ」と訴えます。王様は「じゃあ、鳩と同じ量の私の肉をあげよう」と言って、秤の一方に鳩を載せ、一方に王様の肉を削って乗せますが、とうとう王様の体全部を載せて秤はつり合ったという物語なんです。それを聞いた中山さんが「仏様のはかりは温かい」と言ったんです。

中山さんは山本の開拓に育ち、両親は朝早くから夜暗くまで働いて、あたたかな家庭を願っても出来なかつたんだと思います。一人で親の帰りを待っている心細さや、遠く離れたお隣りへ回覧板を持って行く怖さも話してました。ものに怯え、世間を恐れ震えるように生きていたのです。

自分は大人になれない人間、アダルトチルドレンだと言っていました。でも世間に汚されてない澄んだ感性を持っていました。お料理も五目豆を上手に炊いたり、フキを炊いて丁寧に並べて持ってきてくれました。遠慮しながら恐る恐る生きて、最後は近くの川に入水自殺をしてしまいました。

もう少し辛抱して聞法してくれたらと悔しい最後でしたが、中山さんには精いっぱい的一生だったのでしょう。本当に中山さんだからこそ感じられた仏様のはかりの温かさだったのですね。小さな鳩と王様のいのちが平等だという世界を浄土というのでしょね。私達のいのちはそういう大地にしっかりと根を下ろしたいと願っています。

いのちの大地に根を下ろして



紫 苑

今年も知道さんが夕顔の種を湿った綿の上に並べて芽を出させました。最初に白い芽が出てきましたが、それは根っこでした。芽は後から出てくるのです。種の命を花咲かせるのに、まず根を下ろす大地を求めるんです。

松本梶丸先生に『いのちの大地に根を下ろして』という題の本がありました。根を育む大地にしっかりと根を下ろさねばならないのです。浄土真宗の教えはいのちを生かしていく大地を与えて下さる。浄穢や好悪によって差別しない大地。皆共に在る大地。大地を持たない花を造花と言うんですね。自然の花は大地に根を下ろして花を咲かせ、花はしぼんで大地に帰り、新しい命を育む大地を育てていきます。私達も本願の大地に芽を出した草のようなものですから、念仏によっていのちの根っこをしっかりと下ろして、いのちの大地を豊かなものにしていく営みに参与していかねばならないと思います。

彼岸会 スナツプ



彼岸会並永代経法要莊嚴
1年間の物故者追弔



スマホでQRコードを読み込むと
ユーチューブで
法話が聞けます。

感 話



踊りを披露
してくれた
皆さま、あ
りがとう。



石田 誓



深蔵加代子



小若女弘子



渡辺和義

第28回

ご門徒さんこんにちわ！

私が謎

だから聞いていきたい

香田 紀子 大塚

今回は勝福寺のいろんな場面で、てきぱきと動き回って元気な香田紀子さんをお尋ねしました。

大黒柱

香田紀子さんは昭和15年6月生まれの83歳です。宇佐市南宇佐に9人兄弟の末っ子で母親が42歳の時の子どもです。父親は農業をしながら町会議員もしていたようですが、香田さんが18歳の時に亡くなりました。母親はリュウマチを患っており、寝込むことが多かったそうです。

女の兄弟は4人ですが、香田さんが中学三年生の時にはみんな結婚して家を出てしまい、残っているのは香田さん一人でした。家にはリュウマチで寝込んでいた母親や幼い兄の子どもなどがおり、そうした家族の

世話をしたり朝ご飯を炊いたりしてから学校に出かけるのが日課でした。中学を卒業すると長洲高校の定時制にすすみました。当時の長洲高校の定時制は、農繁期には学校が長期休暇となる昼間通学の4年制でした。そこを卒業した後は家族の世話などをするため家に残りました

次のステップに

その香田さんに縁談が無い込んだのは海上保安庁に勤める次兄からでした。同じ船に乗っている部下が対馬の辺鄙な場所に転勤になり、そこへ赴任する時は夫婦同伴が原則というような場所だったそうです。部下の転勤先を聞いた兄が「俺の妹なら、どんなところだって辛抱できるぞ」と声を掛けてくれたそうです。こう

して結婚となり、ご主人と任地の対馬に赴いたのは24歳のときでした。

宇佐の地へ

海上保安庁は2、3年おきに転勤があるそうで、以後、退職するまで九州各地十数カ所を転勤して回りました。その間に香田さんは見事な人扱いのコツを覚えたのではないでしょう

うか。ところで、香田さんより4歳年上のご主人は、中国の大連で昭和11年



に生まれました。終戦後、母の故郷の別府に引き上げて来る時、引き上げ船の船つき場で、「わーわー」泣く子供を親が置いていく場面を目撃したご主人は、三人の子どもを離さず連れて帰ってくれた母親に終生感謝していたそうです。

そういうこともあって、ご主人の

最後の勤務地が大分になったとき、別府で義母と同居することになりました。ところが嫁姑の関係がうまくいかず、一年で体調を崩してしまいました。そんなこともあって、香田さんの姉の紹介で大塚に家を建て引越して来たのです。

しかし、まもなく、ご主人に癌が見つかり、結局再発して62歳の若さで亡くなりました。そのときの葬式がご縁で勝福寺の門徒になったのでした。

出遇い

香田さんは、ご主人が死んで1年くらいは家に引き籠もっていたそうです。そんな時、坊守さんから「近所の岡本照子さんの家で『山を越える会』という聞法会をしているんだけど、来ない」と声を掛けられました。それが仏法に触れたきっかけです。

「山を越える会」という会名は、細川巖先生からつけていただいたものだそうです。坊守さんが京都から大分に来た時、聞法の場を探し求めていたら、豊後高田の萬徳寺さんで細川先生が毎月『歎異抄』の講義をされていると聞き、子どもをおん

ぶして聴聞しに行くようになったそうです。それがご縁で、岡本さんたちと始めた聞法会の名を先生にお願ひしてつけていただいたということでした。

その「山を越える会」に行つてみたら今までとは全く違う世界でした。今までなら世間話で終わるのに、細川先生や林曉宇先生の本を読んだり、自分自身が問われる会でした。

あの人は誰？

坊守さんに仏法の教えを聞くうちに、住職さんからはお寺の手伝いを頼まれたりするようになり、それが嬉しくって、水を獲た魚のようにお寺の中を動き回りました。以後、香田さんと勝福寺との関係は家族的な関係と門徒の両方になりました。

お寺のいろんな場に現れて「純子さん、純子さん」と呼んでうろうろしている香田さんを見て、多くの門徒さんは「あの人は誰かい？ なんか自分方みたいにしとる」と戸惑ったそうです。

そんな香田さんに、お寺に20数年通われて、どんなことを学ばれたかお聞きしました。

自分なんて、ない

お寺に行くようになる前は、何でもできて、人さまから有り難く思われることがいいことだと思つてやつてきたが、そんなこと全部いらんこ

とやつた。
これまで「自分、自分、自分」で生きてきたけど、「自分なんて、ないんだよ」と言われ、「なんのこっちゃ」とずいぶん戸惑ったけど、やがて「そうなんだ」と領けるようになって、はじめて、お念仏の有り難さがわかつてきたんよ。

今から思えば、別府で嫁姑で苦しんだ経験が尊いと思うの。あの時は姑さんが全部悪いと思つていたが、そうではなく、自分の思いが自分を苦しめていたんだね。そのことがわかつて楽になったね。

独りでおれる

坊守さんから、住岡夜晃^{やこう}先生の言葉をひいて「香田さんは、仏さまの座布団を土足で踏んだくつているんですよ」と言われたりしてね。

また、「過ぎゆきしことには触れじ忘れ霜」という藤原利枝先生の句を教えていただき、折々にうなずか

せてもらっています。

この春はひどいぎっくり腰で、念願だった慶讃法要に参れなかったんだけど、軽く寝ておれた。仏さんがついていてくれるから、独りでおれる。そういう力をもらえました。

卒業のない喜び

あれから二十年以上たつけど、今日までこうして続けてこれたのは岡本さんのおかげやね。岡本さんとは喧嘩もよくしたけど、すぐ、「香田さん、一緒に行こう」と誘つてくれる。有り難いね。

これまでずっと、分かりたくつてたまらんで聞いてきたけど、「ああ、わからんでいいんだ。わかるわけないんだ」ということがわかつてきた。それでも、聞きたい。「私って、何者なんだろう」。それが今でも謎なの。そのわからん自分を大事にして、死ぬまで聞いていきたい。いつまでたつても卒業がない。そんな喜びがあるね。

苦い人に願うこと

みんな、お寺に来てもらいたいね。家でテレビを見てるより、何かあつ

たら、お寺に行こうかって、なんかほっとするものが皆さんあるんじゃないかと思うんですけどね。とおっしゃいました。
誰からも頼られる香田さん、どうぞいつまでもお元気で勝福寺を盛り上げて下さい。

(文責 渡辺 重昭)

子ども美術館



(上) 向野鈴菜 院内北部小3年
(左) 渡辺 咲 なぎさ幼稚園4才



リレー随想

不思議を探して聴聞したい

松尾由美子（四日市）



私の父は戦争体験者です。トラックの死者の中にいたそうです。あの看護師さんが父の命に気づき助けられ、私が存在します。

私は5人兄弟姉妹の末っ子で戦後の混乱の中、家族の苦勞も知らずのんびり生きてたように思います。高校生の頃は高度成長の波に乗った社会は、生き生きと華やかな世界で、OLとしておしゃれなファッションで通勤する姉たちはわたしの憧れの人達でした。また私の生きる道しるべであり、随分お世話にもなりました。

今年のご本山の慶讃法要の参拝に参加して、今からは私の元気なうちに、年離れた兄弟姉妹の訪問の旅をして回ろうと決意しました。すでに東京、大阪、長崎、福岡と訪ねて久しぶりの再会を喜ぶと同時に、

時に、お互いの老いを再認識させられました。あと何回、訪問できるでしょう。

この頃、世界のニュースは厳しい状況になっていきます。戦争が繰り返さないよう、当たり前の日々がおくれますよう、お寺での聴聞を続け阿弥陀如来に手を合わせ、私が生かされた不思議を探したいと思います。

自由な語り合いの集い

はじめの一步

新たな出発！

是非出席しませんか！

参加者が、日々思うことを自由に語り合うことを目的として「はじめの一步」が毎月一回、勝福寺で行われています。

残念ながら最近参加者が少なくなると共に、会の目的や内容がはつきりしないという意見をよく聞きます。

では、この会がどうあればもっとたくさんの方に参加してもらえるか11月下旬に関係者に集まってもらい、会のあり方について、い

ろんなご意見等を頂きました。それを受けて来年1月から新しい「はじめの一步」は以下のような内容でスタートします。

○「折角行くんだから、仏法に少しは触れたいな」という気持ち大切にします。

○前半は身近な出来事などを話し、意見を交わし合う。後半は一つの本を決めて読んでいく。

○歎異抄や聖典等を読むのではなく、住職や坊主さんの本を読む。

聞法会はじつと座って聞いていることが多いですが、この会は自由に質問が出来るような会を目指しています。是非ご参加下さい。

※1月の「はじめの一步」は

1月13日（土）13時半から。

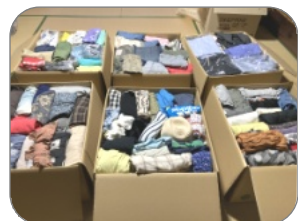
響流句会

ひと時を光に濡るる十三夜
茄子一つ植ゑて事足る老い二人
ふる里の社の土手に萩ゆれる
落ち蟬やいのち尽くして天仰ぐ
ガザの児の玉の緒ならむ星冴ゆる
産声を拝みて聞けり秋夕焼
灯火消し月の褥にくるまるる
柔道に行く幼子や月の道
闇に生まれ闇に隠るる初螢

小若女弘子
國廣喜一郎
後藤みよこ
佐藤麗子
藤谷純子
藤谷知知
本多加代子
松本知代
吉武康子

令和六年 年回表

一周忌	令和五年
三回忌	令和四年
七回忌	平成三十年
十三回忌	平成二十四年
十七回忌	平成二十年
二十五回忌	平成十二年
三十三回忌	平成四年
五十回忌	昭和五十年



10月20日
ミンダナオ子ども図書館
に「古着・カバン・学用品など」を発送。クリスマスまでに到着予定。



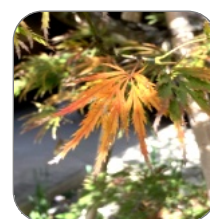
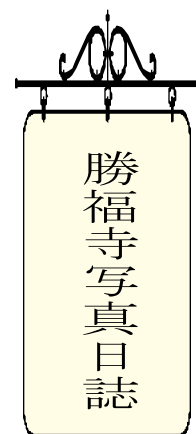
10月20日 ゆきこに赤ちゃん(悠大くん)が授かる。
99才と0才のツーショット



9月29日 仲秋の名月
香下ダムにてお月見



四日市別院山門



10月30日 信と風さんにも第2子(爽くん)が誕生しました。



10月28日御名を聞く会
松尾整子先生が癌の身を
抱えて長崎からお念
仏を届けに来て下さる。



(坊守)

11月28日 御名を聞く会
親鸞聖人のご命日。休憩
時には「ぜんざい」が。
お産で帰っていた娘が、
赤ちゃんと一緒に法話を
聞いてくれました。



(住職)



(マユミ)



先生のご法話が
聞けます

★今年、特に印象に残っていることは4月にご本山の慶讃法要に参加したこと。そしてその途中で京都の国立博物館に展示されていた親鸞聖人直筆の教行信証と息子善鸞への義絶状の写しを見た時でした。聖人の汗と涙が見えてくるようでした。

勝福寺の末席に座らせてもらい、浄土真宗の教えがいくらか分かるようになった幸せを感じました。来年はまた、いろんなご門徒さんにお会いして、いろんなお話を聞かせていただくのを楽しみにしています。どうぞよろしく願います。

(重昭)

あとがき

*当番地区 常徳・院内です。
よろしく願います。

報恩講法要

26日(金) 28日(日)

13時半～16時

お華束つき

24日(水) 13時半～15時半

おみがき・掃除

1月21日(日) 13時半～15時半

御正忌報恩講